大島半島のニソの杜の習俗調査報告書刊行記念公開シンポジウム記録集

「ニソの杜と先祖祭り」

おおい町教育委員会

目次

巻頭図版
序
例言
目次

一　基調講演

1　「ニソの杜から考える地域文化」
国立歴史民俗博物館名誉教授　福田アジオ……3

2　「薩摩・大隅のモイドン（森殿）とウッガン（内神）
―その変遷をめぐって―」
南方民俗文化研究所主宰　川野　和昭……21

二　パネルディスカッション

「ニソの杜と先祖祭り」……33

パネリスト
國學院大學教授　小川　直之
國學院大學教授　新谷　尚紀
近畿大学名誉教授　野本　寛一
佛教大学教授　八木　透
コーディネーター　元福井県文化財保護審議会委員　金田　久璋

三　総括

「ニソの杜と日本人の祖霊信仰」　金田　久璋……55

四　講師・パネリスト略歴……59

五　論文集

薩摩・大隅のモイドン（森殿）とウッガン（内神）―その変遷を中心に―
川野　和昭……63

1　はじめに
2　小野重朗のモイドン考とウッガン考
3　小野重朗の現在的展開
4　薩摩・大隅のモイドンとおおい町のニソの杜との比較
5　まとめ　―変遷を中心に―

ニソの杜とは何か
―これまでの日本民俗学の取り組みと、今回の調査結果からの報告―
新谷　尚紀……85

1　ニソの杜についての研究史
2　ニソの杜の祭祀

若狭大島のニソの杜祭祀と信仰世界
川嶋　麗華……161

1　若狭大島の信仰世界
2　祭祀と祀り田
3　総括　―まとめ―

大島の集落とニソの杜他位置図

基調講演1
ニソの杜から考える地域文化

国立歴史民俗博物館名誉教授
福田　アジオ

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました福田でございます。たぶん宣伝のポスターやリーフレットをご覧になって、まずは私の名前が大変おかしいので、その興味から、あるいは好奇心からお出掛けくださった方も中にはおられるのではないかと思いますけど、頂戴した時間がそれほどございませんので、お土産話として、私の名前の秘密を申し上げることは控えたいと思います。戸籍名です。アジオとカタカナで書く、日本人にこんな名前の人はほとんどいないだろうと思います。私自身も、自分で不思議に思うんですけど、これが戸籍に、親が勝手につけて登録されているということです。ですから、サザエさんの一家とは関係ありません。サザエさんの一家と、どこか連想できるところはあるんですが、確かにアジなんですよね。「オ」がついているという点では、サザエさんは「カツオ」にしても何にしても、水産物そのものが名前ですけど、私の場合はアジにオがついているという点ではちょっと違うのでありますけど、サザエさん一家よりもちょっと早く生まれております。というわけで、それ以上来歴を話していると、それでだいたい二、三十分過ぎてしまいますので、ここまでにさせていただいて、何かの機会があれば、またお話をさせていただくということにしたいと思います。

それで今日、前座として、後ほどパネルディスカッションで皆さんが議論なさる前に、少しニソの杜とは何かということについての、私なりのまとめをさせていただいて、予備知識、あるいは予備の情報とさせていただきたいと思っております。

お手元には簡単な要項のレジュメがいっているかと思いますが、その順番にしたがって、頂戴した時間、お話をしたいと思います。

まず私がこういうところに立って、最初にお話をすることになるのはなぜかというと、レジュメにもありますように、おそらく会場にいらっしゃる皆さんもそうですけど、皆さんも含めて、私より年配の方は違うかもしれませんけど、ニソの杜というもの、あるいは大島のいろんな行事を調査したと言いますでしょうか、お邪魔して見学させていただき、いろいろと話を伺ったのが、おそらくこの中では私が一番古いのではないかと思います。その古さ、要するに半世紀も前、五〇年も前にお伺いして、見せていただき、お話を伺った。そういう過去、遠い昔の人間であるがゆえに、今日は特に前座を務めさせていただくということになっているのではないかと思います。

お話は、パワーポイントでさせていただきたいと思います。進め方としては、基本的にお手元にいっているレジュメと同じことがパワーポイントの画面で出てきまして、どの程度皆様からご覧いただけるか分かりませんけど、パワーポイントでの順番、それはお手元のレジュメの順番ということになりますが、それでお話をしたいと思います。

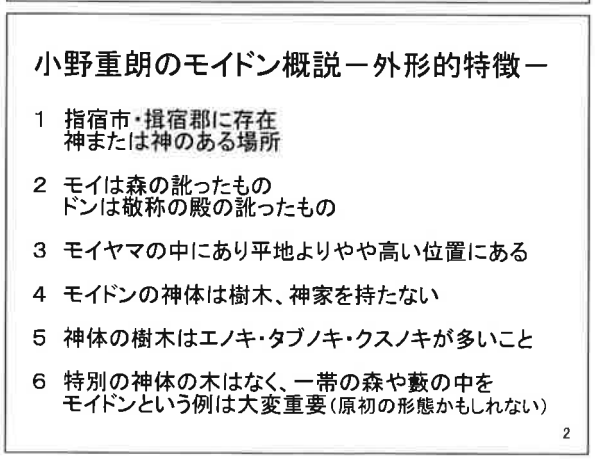
私が大島に初めて参ったのは大変遠い昔でして、一九六四年、昭和三十九年であります。五〇年余り前

基調講演2
薩摩・大隅のモイドン（森殿）とウッガン（内神）
―その変遷をめぐって―

南方民俗文化研究所主宰
川野　和昭

こんにちは。鹿児島から参りました川野でございます。

私は、ニソの杜というのに実際に接したのは、この調査が始まってからでございます。最初に驚きましたのは、この北国といってはいけませんが、北陸にこんな大きなタブノキが点在しているということに度肝を抜かれました。タブノキというのは、南の、われわれの世界だというふうに思っていたのですが、鹿児島をはるかにしのぐようなタブノキがあるということを知ることができて、南九州の「モイドン」と同じような「モリ」と呼ばれるものが存在することを実感いたしました。南九州の「モイドン」を研究したのは、小野重朗という鹿児島在住の研究者であります。小野重朗はこの「モイドン」の研究を一九五五年から調査を始める。これに対して柳田国男は高く評価いたしまして、小野先生が研究成果を送るたびに、熱烈な恋文と言ってもよい葉書を返すわけですね。それはたとえば、最初の葉書に、どういうふうに書いてあるのかというと「鹿児島、薩南両民俗の御文が、東京にいても大きな刺激にて、現に国学院などにも神道史の研究に、この方面から入っていこうとする計画これあり。小生も大いに力を入れ候」ということを書いて寄こします。あるいは「郷土のためのみならず、国全体のためにも大いなる祈念とし存じ候。小生も終戦前から祖霊の山に登り、また始終泊り住むという、始終することを考えつき、当時、先祖の話という□に□引き続き、今もってその不備を補いつつあり。一日も早くその成果を世に公にすらるる日を待ちかね申し候」と、あるいは「山宮考一冊呈上、残部世に稀に候なり。なるたけ多くの同志に御読ませ賜りたく候。なお十年後の増加資料も近々国学院の研究会に発表するつもり」と書いて、その研究の進展を大変期待いたしました。



パネルディスカッション
ニソの杜と先祖祭り

パネリスト　國學院大學教授　小川　直之
國學院大學教授　新谷　尚紀
近畿大学名誉教授　野本　寛一
佛教大学教授　八木　透
コーディネーター　元福井県文化財保護審議会委員　金田　久璋

【金田】

金田でございます。それではただ今からパネルディスカッションを開催いたします。

先ほどの基調講演のお二人の先生、福田先生の「ニソの杜から考える地域文化」、それから川野先生の南九州の森神につきましての詳細なお話をいただきまして、特に福田先生は五〇年前からここに登壇している方々の中で一番早く、二十三歳と言っておられましたが、まだ青戸の大橋ができる前から調査に入っておられた先生で、非常に往時の写真なども見せていただいて大変参考になりました。私自身は実は、若狭全域のダイジョコ信仰とかジノカミとかジノッサンというのをずっと調査しており、ニソの杜のことはもちろん知っていました。けれども、ニソの杜というと、どうも祭祀組織が複雑だなという思いもあり最後に回しており、名著出版の『歴史手帖』の若狭特集の時に初めてニソの杜に入ったわけですけれども、そのときには当然橋が完成していました。そういう経緯をたどっているわけですけれども、福田先生のお話というのは、特にニソの杜の所在地、祭り場と言ってもいいかもわかりませんが、その中で「祠地（しち）」、「ほこらち」という言葉に関心を持たれて、それをきちんと論及されました。私もその「祠地」というのは非常に気に掛かっていたわけですけれども、では、それで分かることは何かというと、結局分からないというようなことになってしまうのではないかと思います。それから、モイドンを主に、モイドン・ウッガン・モリカクラについてご報告いただきました、川野先生のニソの杜といかに繋がりが深いかということで、私もモイドンとかウッガンを見学に行ったこともありますが、大変注目すべき報告をいただきました。

今日は四人の現代日本民俗学を代表するような、一線でご活躍されている先生方にご登壇いただきました。それぞれニソの杜の調査報告書にご執筆

金田 久璋 氏

ニソの杜と日本人の祖霊信仰

金田　久璋

果たしてニソの杜に何が問われてきたのか。おおい町大島の「二十四名（みょう）の開拓先祖」を祀るとされる聖地、ニソの杜が平成二十二年（二〇一〇）に国選択無形民俗文化財に指定されてはや八年になる。昨年度末には大部の二冊の調査報告書が刊行された。十一月二十四日にその刊行を記念してシンポジウム「ニソの杜と先祖祭り」が開催され、あらためて日本人の基層の民俗信仰である祖先祭祀の基盤を成す、祖霊信仰をめぐって活発な論議が行われたことは本紙既報の通りである。六名の現代日本民俗学界の第一線で活躍中の研究者が、それぞれの立場からニソの杜について論点をつく発言をされた。

まず、昭和三十九年（一九六四）に和歌森太郎率いる福井県若狭地方民俗総合調査の一員として来島された福田アジオ氏は、基調講演でこれまでの調査をふまえ、祭り場の地目の「祠地」は大島独自なもので、土地台帳制度の検討をしてみてもその理由は不明とされた。また、鈴木棠三や安間清（大野市出身）などの柳田国男の指導を受けた研究者が、郷土史家である大谷信雄の研究や言説を無批判に応用した結果、ニソの杜が祖霊信仰のモデルケースとして位置付けられたことを指摘された。氏によれば当時「モリ」「モリサン」という呼称を聞いたが「ニソの杜」の名称は確認されなかったともいう。確かに「杜」の字を宛てたことは民俗語彙（ごい）にはなじまない。

これまでの研究では「名」にも疑義が呈されているが、「二十四名の百姓」（「長楽寺縁起」）などまったく史料がないわけではない。祭神に「大地主大神」「遠祖大神」とあるように、野本寛一氏は遠い祖先（遠祖）と大地の霊（地霊）との関係を指摘されたが、小浜市奥田縄の四塚では「先祖の祭りや、地の神の祭りや」と呼んでいる。ホトケは死後三十三回忌のトムライアゲがすむと地の神やダイジョコ、先祖神になるとされている。

県内および隣県をくまなく歩いたわたしの経験から、ニソの杜に類似の民俗信仰であるダイジョコや地の神、地主荒神などの調査結果を踏まえれば、大谷信雄の見解はおおむね正しいものと考えられる。ただ、ニソの語源を郷土史家にありがちな「御遠祖」（ミエンソ）などと付会（ふかい）したり、神官として地目の「墓地」を極力嫌忌（けんき）したことは大きな過誤としていい。決して土地が狭小なために、祭場が墓地とされたのではない。古墳上に祀られていたり、付近から人骨も出土していることは、発掘に関わった考古学者も認定しており重視されねばならないと考えるが、如何か。「ニソ」は柳田の言うように「ニジュウソウ」、すなわち旧暦十一月二十三日の霜月祭りであり民間新嘗にほかならない。新谷尚紀氏や小川直之氏は収穫祭として位置付けされたが、その肝心要の祭祀対象が何かが論証されていない。

また、八木透氏は「漁業が発達する以前の段階の屋敷神か近隣の神」とする福田説を支持して、奥三河のジルイやカモンなどの同族で祀る地の神を例に引きニソの杜の古形としている。確かに、いわゆる竹田旦氏が提唱したおおい町名田庄三重の地の神を祀る株講（ニジュウソウ）にも「異姓複合」の祭祀組織が見られる。しばしば同族祭祀のなかにもその現象がないわけではない。娯楽のない時代に近隣の「行場のない家」が講仲間に加入している。

なお、豊田市田代には旧家の開拓先祖を祀る「氏神」の傍に「開博霊神」と刻まれた天正元年（一五七三）の石碑もある。「開博」とは「開拓」に同義である。おおい町名田庄納田終の谷川家文書の「元祖十二名之旧霊地主神」（宝徳二年、一四五〇）や、『若州管内社寺由緒記』（延宝三年、一六七五）に見える若狭町上野木の「大将軍」は、土屋殿という祟り神を祝い込めた「墓」で先祖神とされている。「旧霊」とは「祖先神―祖霊」のこ

薩摩・大隅のモイドン（森殿）とウッガン（内神）
―その変遷を中心に―

川野　和昭

1　はじめに

「モイドン」の研究は、「ウッガン」の研究とともに小野重朗によって、一九五〇年代初めから始められた。その成果は、小野の勤務先である鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部の機関紙『薩南民俗』や鹿児島民俗学会の『鹿児島民俗』、『民俗研究』を通じて発表されていった。その主なものを年代別にあげてみると、「指宿地方の内神一覧」（『薩南民俗』七号　鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部　一九五五）、「指宿地方の内神概説」（『薩南民俗』七号　鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部　一九五五）、「モイドン雑記」（『鹿児島民俗』八号　鹿児島民俗学会　一九五五）、「モイドン概説」（『薩南民俗』一〇号　鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部　一九五五）、「大隅のモイドン」（『民俗研究』三号　鹿児島民俗学会　一九六六）、「森山の分布構造」（『民俗研究』五号　鹿児島民俗学会　一九七〇）である。特に『薩南民俗』紙上における成果は、柳田国男の大きな関心を呼ぶところとなり、昭和三十一年（一九五六）三月六日付けの小野への葉書で「御手紙備さに拝見候鹿児島、薩南両民俗の御文（筆者注　内神特集『薩南民俗』第七号一九五五、「モイドン雑記」『鹿児島民俗』八号　一九五五）ハ東京にても大きな刺激にて現に國學院などニも神道史の研究に此方面から入って行かうとする計画有之小生も大いに力を入れをり候」と書き送り、柳田自身の祖霊信仰の研究の新たな発展につながることを期待し、その研究意義を高く評価するとともに、その研究の推進を強く励ましている。また、小野が柳田に送付した『薩南民俗』第八号（鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部　一九五六、収穫祭特集号　モイドン特集、収穫祭の調査と研究「指宿地方の収穫祭概説」、「指宿地方収穫祭行事・モイドン分布地図」）に対する、昭和三十一年四月十九日付けの返信葉書では、「郷土の為のミならず國全体の為にも大なる記念と存じ候小生も終戦前から祖霊の山に登り又止住することを考へつき当時「先祖の話」といふ一書を公けにし引つづき今以て其の不備を補ひつゝあり（中略）一日も早くその成果の世に公けにせらるゝ日を待兼申候」と書き送り、小野のモイドン研究が『先祖の話』における祖霊信仰の研究を継承することになると意義付け、その公刊を強く期待している。さらに、昭和三十二年（一九五七）五月七日付の葉書では、「山宮考一冊呈上残部世ニ稀ニ候成るたけ多くの同志ニ御讀ませたまはり度候なほ十年後の増加資料も近々國學院の研究會に發表するつもり」と書き送り、『先祖の話』に加えて『山宮考』を仲間とともに読むように勧め、自身も『先祖の話』や『山宮考』以後の資料を基に研究発表することを伝えている。小野のモイドン・内神研究は、晩年の柳田に『先祖の話』や『山宮考』の再考を促すほどに刺激的なものであったのである。

本稿では、小野の研究の足跡をたどりながら、現在のモイドン、ウッガンについて触れ、その変遷をとおして、小野の考えについて検討を加えてみたい。また、若狭地方における「ニソの杜」の信仰との若干の比較も試みてみたい。

2　小野重朗のモイドン考とウッガン考

(1)「モイドン」とは何か

小野が「指宿地方の内神一覧」を基礎に、「モイドン」の特徴をまとめたのが、「モイドン雑記」と「モイドン概説」である。小野は、自らの著

ニソの杜とは何か
―これまでの日本民俗学の取り組みと、今回の調査結果からの報告―

新谷　尚紀

1　ニソの杜についての研究史

(1) 大谷信雄による研究

ニソの杜の研究史の上でまず注目すべき事実は、それが他の民俗学の研究対象たとえば両墓制や宮座祭祀のように、外来の研究者の採訪によって発見されたものではなかったということである。現地の生活者であり自らも伝承者であった大谷信雄（一八六六―一九五七）という人物によって、すでに明治大正期から調査と研究が始められていたということが重要である。

1．自身の調査と稿本整理

大谷信雄は、慶応二年（一八六六）に大島に生まれ、大正元年（一九一二）から大正三年（一九一四）まで大島村の村長を務め、また近代の神職制度が整備される中で島山神社の神主を務めた人物であり、熱心な郷土史の研究者でもあった。昭和十三年（一九三八）に大島を訪れた安達一郎を始め、昭和十九年（一九四四）の鈴木棠三、昭和二十四年（一九四九）の安間清など、大島を訪れる研究者たちにこの地の歴史や文化、とりわけニソの杜についての解説を親切に熱心に行なった人物でもあった。昭和三十二年（一九五七）に九十二歳の長寿をまっとうしたが、手書きの稿本として残されたのが、「島山私考」（未定稿）と「島山神社記」（和綴じ稿本・大正五年（一九一六））である。しかし、その稿本は印刷刊行されることなく、誰もそれを読むことはできなかった。

あらためて、この若狭大島の「ニソの杜」が日本民俗学の研究関心を集めるようになったのは、その大谷信雄からの聞き取りと現地調査を行なった安達一郎「若狭大島採訪記」『南越民俗』二―四（一九三九）や、鈴木棠三「若狭大島民俗記」『ひだびと』一二―三・四・五合併号（一九四四）の刊行を通じてであった。とくに日本の神々の信仰と先祖の御霊（みたま）の祭りとの関係に注目していた柳田国男によって、このニソの杜の信仰についての調査と研究の推進が奨励されることとなったのである。

昭和十四年（一九三九）の安達一郎の報告、昭和十九年の鈴木棠三の報告、そして、後掲の昭和二十五年（一九五〇）と昭和二十七年（一九五二）の安間清の報告、いずれもこの地を訪れた彼らは、すべて大谷信雄の現地解説に基づいてその信仰内容を紹介していったのである。このことからすれば、ここでまず確認しておいた方がよいのは、大谷信雄自身の稿本の記述内容であろう。以下がそれである。

大谷信雄「島山私考」抜粋

にその杜　　（一説ニ　にゑいそ）

一、祭神　　大地主神　　遠祖大神

二、由緒　　創祀年代不詳

口碑

其ノ一　にその神は志摩の元祖に坐まして二十四名の宗家各別に小祠を建て我家の遠祖を祀りこれをにその神と尊称し奉るなり

其ノ二　にその杜は二十四名の宗家　各々我家の祖神を祀りたる処にして其の総数は余永の御祭神数と同じかるべしとの伝えあり　然るに今にその杜の数は二十四箇所よりは多し

実数は知らざれども　想ふにその杜に小杜（こもり）といへるがあり　即此の小杜なるも

若狭大島のニソの杜祭祀と信仰世界

川嶋　麗華

1　若狭大島の信仰世界

ニソの杜の祭祀が行なわれている若狭大島では、そのような杜祀りだけでなく、社寺や宮、堂などにおける様々な信仰と祭祀が併存していた。この大島地区に住みニソの杜を継承してきた祭祀者たちは、ニソの杜の祭祀だけでなく当然それ以外の複数の祭祀も執り行なってきた。つまり、杜祀りは単独で継承されてきたものではなく、他の信仰と祭祀とともにその中で継承されてきたものである。

これまでのニソの杜についての調査と研究は、ニソの杜のみに注視したものであり、大島地区におけるニソの杜の習俗を把握するためには不十分なものであったといえる。ニソの杜の祭祀をより正確に理解するためには、この大島地区における他の信仰や祭祀とともに俯瞰的にその状況を把握し整理する必要がある。そこで本稿では、それらの大島地区における信仰とそのあり方を全体的に整理し比較することによって、①大島地区における信仰の特徴、②大島地区の信仰世界の中におけるニソの杜の特徴、の二点について分析を試みる。

まず、主な信仰の場とハカ・サンマイについて、その概要と、大島地区での位置関係を整理する（地図・大島の集落とニソの杜他位置図を参照）。以下、(1) ニソの杜、では、これまでに報告されているニソの杜について、(2) その他の信仰の場、では、神社・宮、寺・堂、ヤマノクチなどの信仰の場とハカ・サンマイについての把握を試みる。なお、これらの信仰の場における祭祀とその祀り手については、2祭祀と祀り田、で記述する。

本稿における表記はそれぞれ次のようにした。浦底は行政区分では西村となっているが、現地の認識に準じて浦底と西村は別の集落とする。ニソの杜を表記するにあたり、これまでの研究・報告で用いられてきた呼称ではなく、表3ニソの杜の祭祀における供物と設え、の番号①から㉚を用いる。祀り手の家々は、原則として屋号または通称を用い、それとともに（　）内に表5大島地区の家一覧、の家番号を付記する。これまでの研究については、ここでは著者と年度のみを記す。その詳細については、本書の「ニソの杜とは何か―これまでの日本民俗学の取り組みと、今回の調査結果からの報告―」（新谷尚紀）を参照していただきたい。

また、筆者は平成二十七年（二〇一五）度から平成二十九年（二〇一七）度にかけて調査を行なった。

(1) ニソの杜

1．ニソの杜の構成要素

ニソの杜は、大谷信雄から研究者に知らされた習俗であり、大谷信雄自身も大正十年（一九二一）頃に行なった調査をもとに「島山私考」に記録を残している。この「島山私考」を始めとする複数の報告書において(1)、宮留から浦底まで合わせて三〇ヵ所のニソの杜が報告されている(2)。しかし、大谷信雄が何を基準として三〇ヵ所のニソの杜を選定したかは明らかでない。ニソの杜について、「島山私考」では「小祠を建てて我家の遠祖を祀りこれをにその神と尊称し奉る」「にその祭りは霜月廿二日の夜に於て各にその杜に定めの献饌をなし翌二十三日に直會式を執り行ふ　これをにその講と云ひ居れり」「にその講には各其の杜の神に縁ある宗家を始め其の分家等悉く参集して式に與かれり」とある。その後の『福井県大飯郡誌』（福井県大飯郡教育会編　一九三一）でも同様の説明があり、「若狭大島採訪記」（安達